

学内広報

2026.1.26

no. 1602



馬術部の森本理香子さん（経済学部4年）とコタロウ号@三鷹馬場（写真：中西祐介）



『風姿花伝』が「世界の記憶」の候補に
本郷正門「パープル・ライトアップ」
2025年度業務改革総長賞
「淡青評論」AIコラムをめぐって～読者からのフィードバック～

『風姿花伝』が 「世界の記憶」の 国内候補に

デジタルアーカイブ
で東大が貢献

歴史的に重要な文書や絵画などを保護するユネスコ（国連教育科学文化機関）の「世界の記憶」※。その国内候補として、昨年11月、観世宗家伝来 世阿弥能楽論『風姿花伝』が選定されました。本学が公開する「観世アーカイブ」※で閲覧できる、日本が世界に誇る貴重文書です。その概要と今後の展望について、能楽研究の第一人者と今回の選定に尽力した研究者に解説をお願いしました。登録の可否は2027年4月頃に発表される予定です。

能と狂言をあわせて能楽といいます。能はシリアルに異界や死者を描き、狂言はコミカルに現世の話題を扱うのが特徴。かつて三島由紀夫は、能楽をダムに喰えました。大量の文化が蓄積し、そこから放流が起きて新しい文化が生まれる。能楽とはそうした機能を持つ装置です。『千と千尋の神隠し』※ではカオナシや龍といった異界の住人や能舞台風の湯屋が登場します。『すすめの戸締まり』※で描かれた後ろ戸は能楽の「翁」という演目と結びつきます。現代の作品にも能楽の世界観は息づいているのです。

おそらく世界初の総合的演劇書

能楽を大成した世阿弥（1363-1443）の前期の主著が、おそらく世界初の総合的演劇書である『風姿花伝』です。役者であり劇作家であり演出家でも批評家でもあった世阿弥は、フランスの研究者ルネ・シフェルが「舞台のダ・ヴィンチ」と評した通り、空前絶後の演劇人でした。活躍から約600年。その作品はいまも演じられており、私もいつも感動させられます。こうした総合演劇が日本にあるのは奇跡だと思います。

世阿弥の父・觀阿弥を初代とし、現在は26世の觀世清和さんが当主を務める觀世宗家には、世阿弥直筆のものを含む『風姿花伝』が残ります。全7編の文書は大変やそれに準じる弟子だけに見せた秘伝書。1909年に吉田東伍という学者が本で紹介して初めて世に知られるようになりました。

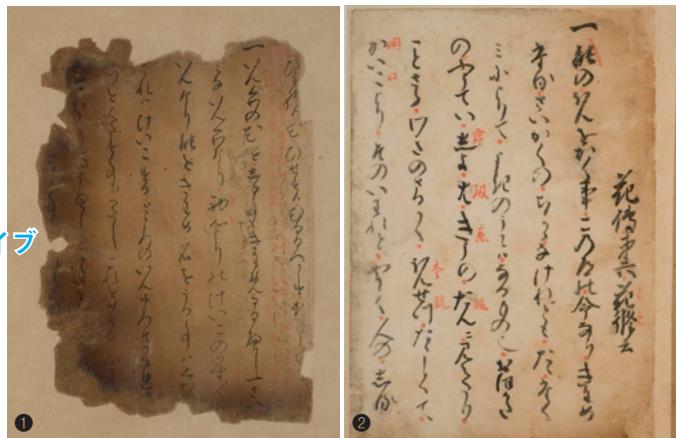
第6編『花伝第六花修』の冒頭には、「能

の本を書く事、この道の命なり」と書かれています。世阿弥にとって、観客をいかに感動させるかが一番の関心事。観客をどう喜ばせるかにこだわった彼は、演劇でマーケティングを追求するなかで次々に新作を書き多くの演劇論を残しました。『風姿花伝』で論じたのは、芸の神髄「花」について。有名な「秘すれば花」という言葉は第7編に出てきます。隠していたものを披露することで、観客は驚き、感動するという意味です。

観世宗家の貴重文書をデジタル化

「世界の記憶」の申請に関しては、2025年3月に産経新聞に掲載された觀世清和さんの記事が大きなきっかけでした。界隈で申請の機運が高まり、旧知のご縁から相談をいただいた形です。私だけでは大変なので、かつての学生の高橋悠介さんを推薦し、申請書の準備に尽力してもらいました。

1991年設立の觀世文庫には4500点ほどの資料があります。私は2006年から科研費を活用して資料のデジタル化と目録作成を続けてきました。その成果をもとに、附属図書館の協力を得て2009年に「観世アーカイブ」を公開し、駒場コミュニケーション・プラザで記念の薪能を、駒場博物館では特別展示を行いました。文庫の世阿弥直筆本を全て揃える空前の展示でした。「世界の記憶」選定の暁には、いろいろな企画を通じ、能楽の魅力をより多くの皆さんに伝えたいと思っています。



①世阿弥直筆『花伝第七別紙口伝』／変色部分は火災の跡。「関東大震災を経た24世の觀世元滋さんが借金をしてまで丈夫な蔵を建てたおかげで、東京大空襲でも文書は無事でした」（松岡）②世阿弥直筆『花伝第六花修』／「奥書に「心ざしの芸人より外は一見をもゆるすべからず」と書かれており、これが「芸人」という言葉の初出ではないかと考えられています」（松岡）



松岡心平
総合文化研究科名誉教授

教養学部生の頃に観た能の舞台に衝撃を受け、法学部志望から一転、能楽研究の道へ。『宴の身体』（岩波現代文庫）、『中世芸能講義』（講談社）など著書多数。

昨年の6月～8月、英語と日本語の両方で書類作りに集中しました。歴史的意義の紹介に加え、ピーター・ブルック、ロバート・ウィルソンといった海外の演出家や識者たちが世阿弥を高く評価していることや、『風姿花伝』が多くの言語に翻訳され、世界の古典となっていることなども紹介しました。「世界の記憶」に認められるには、どこからでも閲覧できる環境が重要になります。松岡先生が世界中の研究者に利用してもらおうと整備した「観世アーカイブ」の意義は大きいと思います。



高橋悠介
慶應義塾大学
附属研究所
斯道文庫 教授



2009年に教養学部60周年を記念して行われた「駒場薪能」の舞台。能の觀世清和さんが「紅葉狩」を、狂言の野村萬斎さんは「萩大名」を演じました。

※これまでの選定例は、ベートーベンの交響曲第9番の直筆譜、アンネの日記、グーテンベルク聖書など。日本からは御堂関白記、東寺百合文書など9点が選ばれています。

※<https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/collection/kanze>

※宮崎駿監督のアニメ映画（2001年）※新海誠監督のアニメ映画（2022年）



本郷正門が紫色に

暴力根絶の願いを込めて
「パープル・ライトアップ」を実施



ジェンダー平等と暴力根絶を願い、年末の本郷正門に紫の光を灯すライトアップが行われました。Safer Campus at UTokyo Projectを契機に、安心・安全なキャンパスと社会の実現を目指す試みの一環。気品のある紫を追求する演出が注目を集めました。

12月17日、「パープル・ライトアップ」点灯式が本郷キャンパス正門で開催されました。女性に対する暴力根絶の運動のシンボルであるパープルリボンにちなみ、全国のタワーやランドマークなどを紫色に照らすという内閣府のキャンペーンの一環で、本学は東京都の大学として唯一の参加登録となりました*。16時40分からの点灯式は、多様性包摂共創センター（IncluDE）ジェンダー・エクイティ推進オフィスの小川真理子副オフィス長の司会で進行しました。

冒頭挨拶で登壇した藤井輝夫総長は、ジェンダー・エクイティ推進オフィスで始動した「Safer Campus at UTokyo Project」を契機として、ハラスメントや暴力の根絶、人権尊重、ジェンダー平等を学内外へ広く発信することを目指していると述べ、「世界の誰もが来なくなる安心・安全なキャンパス、そして社会の実現を目指します。このライトアップが理念を共有し、行動につなげる契機となることを期待します」と話しました。さらに、UTokyo Compass（2021年）、ダイバーシティ＆インクルージョン宣言

（2022年）、昨年5月の総長メッセージなどに言及しながら、DEI推進への強い決意を表明。同プロジェクトの一環として実施した生理用品の配布や教職員研修などの啓発活動の展開についても触れ、このライトアップがこれらの取り組みを社会へ発信する象徴的な試みであることを紹介しました。

続いて、ライトアップのデザインを担当した本学出身の照明デザイナー・石井リーサ明理さん（株式会社I.C.O.N.代表）が登壇し、「心に響く紫」「心をつなぐ光」「心に残る光」をコンセプトに、「大学らしい気品のある紫を作るために、昨日の晩も1%刻みで調整し

ました」と語りました。門柱だけでなく梁も照らすことで人と人のつながりを象徴する光を演出し、よりSaferなキャンパスやインクルーシブな社会の実現への願いを込めたことも紹介しました。

藤井総長、石井さんに相原博昭理事・副学長、林香里理事・副学長が加わって点灯ボタンを押すと、正門はパープルに染まり、ジェンダー平等や安全なキャンパスへの願いを込めた光が輝きました。今回のライトアップは12月23日まで行われ、正門の内と外が紫色の光で包まれる初めての年末となりました。



点灯ボタンに手をかける登壇者の皆さん。石井リーサ明理さん（右端）は駒場の21 KOMCEEや柏のKavli IPMUの照明も手がけています。

多様な背景をもつ人々が尊厳をもって過ごせる、安心・安全なキャンパス環境、ひいては社会を築こうとする願いを込めて、本学では初めてライトアップを実施しました。あらゆる暴力やハラスメントを「見過ごさない」「許さない」という姿勢を発信するとともに、「あなたは一人じゃない」というメッセージを伝えるものです。一人ひとり



小川真理子
ジェンダー・エクイティ推進オフィス
副オフィス長

*2025年度は527施設が参加登録しました（11月時点）。東京都以外の大学としては、岩手大学、静岡大学、山口大学等が参加。東京都の登録機関としては、経団連会館、東京都庁第一本庁舎、東京スカイツリー等が参加しました。https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/no_violence_act/index.html#purple

クラウドツールや生成AIを駆使した試みに高評価が 2025年度 業務改革総長賞

12月19日、業務改革総長賞の表彰式が安田講堂で開催されました。選考された7課題（総長賞1、理事賞2、特別賞4）に対し、藤井輝夫総長と角田喜彦理事（業務改革担当）が表彰状と副賞を授与。続いて行われたプレゼンテーションでは、受賞者が業務改革の試みを紹介し、優れたアイデアを共有しました。会場とウェビナーを合わせて延べ800名以上の教職員が参加し、受賞を祝いました。



総長賞 UTokyo e決裁アプリの開発による、 電子決裁の簡易化と促進

→ DX推進のための
地盤醸成チーム



代表して表彰を受ける（左から）坂口楓太さん、藤森公介さん

理事賞 「秒」で振替! 振替伝票自動仕訳ツール

→ 教養学部等経理課財務チーム係長 松峯正典

取組内容

主に年度末に集中する残額調整や財源修正等の振替伝票の仕訳を自動化するツールを作成。1件あたり数分を要した振替伝票作成時間が約1秒に短縮



され、年度末の超過勤務時間を約45%削減した。生成AIを駆使することで、構想から実装までを1ヶ月で実現した点が生成AIやITツール利活用のモデルケースとして高い評価を得た。

24件の応募があった今年度の業務改革総長賞。応募テーマは「DX・D&I・GXを意識した業務の取組」と「組織的な業務フローや業務分担の改善に関連した取組」。表彰後の講話で藤井輝夫総長は、クラウドツールを駆使した電子決裁アプリの構築、生成AIを効果的に活用した振替伝票の仕訳自動化ツールの作成やAIアシスタントの構築などの受賞課題を紹介し、いずれも

現場における試行錯誤と実践によって具体化されたものだと評しました。そのうえで、このような積み重ねが大学全体の業務のあり方を変えていくと確信していると話しました。総長賞のチームには30万円（国内研修費）、理事賞のチームには10万円（自己研鑽費）、特別賞のチームには5万円（自己研鑽費）の副賞が渡されました。皆さん、おめでとうございます。

取組内容

大学が推奨するTeams「承認」アプリを基盤に、PowerAppsで電子決裁アプリを開発。取り組みメンバーが所属する本部社会連携企画課では会計伝票等を除く7割以上の決裁が本アプリを用いて電子化されている。

評価ポイント ◎本学で提供されているクラウドツール（Microsoft365）を駆使して構築されていて、追加コストゼロで展開可能である点が高い応用性を秘めている。◎学内の電子決裁の普及・促進に資する取り組みで、本学のDX実現に寄与しうるものとして高く評価できる。

理事賞 経理AIアシスタントpowered by Google×ChatGPT連携RAG

→ 農学部・農学生命科学研究科経理課
経費執行チーム係長 有田竜三

取組内容

GoogleスプレッドシートとChatGPTを連携させ、経理業務に関するよくある質問や規程を自動で検索・整理しAIの回答に反映する仕組みを開発。AIによる回答だけでなく、質問されたログフィードバックを収集し、よく出る疑問を可視化することで制度改善の優先順位を客観的に定め計画的な業務改善を可能にした。



特別賞

Microsoft Bookingsを活用した
物品貸し出しのDX化

総合文化研究科・教養学部共通
技術室・18号館共通事務室

「つなぐ」ための法・政治デザインセンターを支える事務体制の確立

法学政治学研究科附属 法・政治
デザインセンター

ノーコードツール導入による公開講座運営の効率化および高度化の実現

メタバース工学部ジュニア講座
業務効率化・高度化プロジェクトチーム

「フォルダに入れるだけ」全自動メール
送信システム

教養学部等経理課財務チーム
大宅海里

◎応募（推薦）課題の取組内容（過去のものを含む）は、東大ポータル・便利帳「業務改革（改善）に関する課題の一覧」をご覧ください。

～読者からのフィードバック～

本誌1599号巻末コラム

「AIを引っ提げて やってきた 大学院生」をめぐって

本誌1599号（2025.10.27）の巻末コラム「淡青評論」を読んだ情報学環の教員から、書かれた内容について意見を述べたいという打診が、本部コミュニケーション戦略課に届きました。学内構成員が個人の立場で自由に意見を述べるコラムとして掲載します。

1599号「淡青評論」コラム



「淡青評論」は学内各部局から選出された教員が、大学の諸問題等に関する意見などを自由に語る長寿コラム欄です。1599号では、経済学研究科の小川光先生が、経済学を専門としていない大学院生が生成AIを活用して経済学に関する高水準の論文を仕上げてきたという出来事を紹介。11月7日にX(旧Twitter)でコラムを紹介する投稿をボストすると瞬く間に拡散し、表示回数は50万回を超えるました。「淡青評論」史上、最も大きな反響を呼んだ回となりました。



↓本編はこちらからご覧ください↓

<https://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou/1599/end.html>

寄稿

情報学環准教授 ダルグリーシュ・ブレガム
Bregham DALGLIESH



Another question concerning AI

In a recent “*Tansei Hyōron*” column (no. 1184), Ogawa Hikaru describes how generative AI (GAI) is transforming the world, particularly academic authorship. Whether painters or professors, everyone is grappling with GAI. For one thing, it epitomises the Promethean gap, which depicts our incapacity to conceive the consequences of what we construct. Furthermore, GAI is a technoscience. With its profit-driven research underwritten by the global gerontocracy of guys, the tech brosarchy enjoys unfettered freedom to manufacture their learning machines.

Ogawa's concern raises the broader question of GAI's threat to thinking. On campuses of concentration, the interpretive sciences specialise in the *how* of it. They inculcate deciphering texts and contemplating otherwise. Teaching students to create meaning initially depends on sensory memory, which intuits things immediately present. Learning subsequently requires students to demonstrate knowledge, or the *what* of thinking. It relies on mind memory that recalls things already past. These individual retentive capacities are notoriously porous. As animals of forgetting, we long ago became digital. We use our fingers to exteriorise our ideas in technical memory, from mulberry paper to data banks. Looping back into our embodied brains, we re-present our previously scattered thoughts as presto thinking. Teaching and learning are therefore strategic and serendipitous processes. Notwithstanding the imperialism of concepts, they spawn a subject of knowledge, which is the holy grail of GAI, and a self with agency that distinguishes me from you.

Getting GAI to comprehend for me overrides having a say in what I know and who I am. The journey becomes superfluous, nay a burden given the capacity of GAI to compute; only the destination counts. Akin to leapfrogging life at birth to get to death, differences in the know-what of each person remain, yet we become the same in our inability to know-why. GAI hereby makes consultants of students. Skilled in sourcing information from Cartesian clouds in space, thinkers adept in questioning their time and place become extinct. In short, by deferring to GAI we not only abdicate constituting ourselves as subjects of thinking and acting, but we also enrich its promoters and enhance the powers that support them. For these reasons, we ought to discourage students from the nihilistic gymnastics of GAI, though with Ogawa I fear the horse has already bolted for Gen Z. 

(大意)

「淡青評論」において小川光先生は、生成AI（GAI）が世界、とりわけ学術的著述や教育に与える根本的な影響を論じています。GAIは、人間が自ら作った技術の帰結を予測できないといわゆる「プロメテウスのギャップ」を体現し、利益主導的で男性中心的なテクノサイエンスの政治構造に支えられて發展してきました。

ですが、これまでそこから主体的思考が形成されてきたといえます。しかし、GAIに理解を委ねすることで、知ることや「なぜ」を問う主体性が失われ、学生は思考する存在から情報を操作するコンサルタントへと変えられてしまうのではないでしょうか。

私たちには、GAIに従うことで、思考と行動の主体としての立場を放棄するだけでなく、GAIの推進者を豊かにし、彼らを支える力を強めてしまいます。学生たちはGAIの虚無主義的な振る舞いから距離を置くべきだと私は考えますが、Z世代のなかではすでにその流れが始まっているのもかもしれません。

※生成AI（ChatGPT）による要約です。元原稿と比べて生成AIの現在地をご確認ください



教養教育の現場から

リベラル・アーツの風

第73回

東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

足掛け19年の挑戦を未来の日本へ

／環境エネルギー科学特別部門の歩みと部門長のメッセージ

2007年に前身の部門が発足

——部門の沿革を教えてください。

「小宮山宏総長の時代にNEDOの支援を受け、駒場の3部局（教養、生研、先端研）横断で教養学部附属教養教育開発機構（現・KOMEX）にNEDO新環境エネルギー科学創成特別部門（2007年～2012年）を設置しました。地球温暖化の主因とされる二酸化炭素の排出源は9割以上がエネルギー由来ですから、環境とエネルギーの問題は表裏一体で切り離せません。そのような視点で、環境とエネルギーの課題の同時解決を指向した教育を進めることが目的でした。この5年プロジェクトの終盤となる2011年に東日本大震災が起こり、環境とエネルギーの関係が一般社会でも重要な問題と捉えられるようになりました。このような状況を踏まえ、NEDOの支援終了後も自己資金で活動を続けるべく誕生したのが、2012年から始まった環境エネルギー科学特別部門です」

——部門の活動は、どのように広がっていったのでしょうか。

「まず、3部局に広がっていた人的リソースを教養学部に集約した上で、他部局

KOMEXシンポジウム

3月9日(月)10～17時 @教養学部13号館

開会挨拶／寺田寅彦（総合文化研究科長）

教養教育高度化機構について／

増田建（機構長）

講演1／Urban Rural の未来

福士謙介（未来ビジョン研究センター長）

講演2／ミライ・ハビタット：自律共創の仕組みをつくる

浅見泰司（空間情報科学研究センター）

講演3／水と持続可能な開発

沖大幹（気候と社会連携研究機構長）

講演4／気候の危機にどう向き合うか

江守正多（未来ビジョン研究センター）

講演5／日本の再生可能エネルギー技術開発戦略

山田宏之（NEDO再生可能エネルギー部長）

司会：瀬川浩司

からの兼務教員や外部からの客員教員に加えスポットでお招きする外部講師の皆様にご協力いただく体制を整えました。また、学生の教育だけでなく、2016年には社会人向けの生涯学習プログラム「グレーター東大塾」の一つとして「水素社会から日本のエネルギーの未来を考える」を企画運営し、社会人教育も担いました。このグレーター東大塾の修了生を中心に、2019年には「サステナブル未来社会創造プラットフォーム」という产学連携コンソーシアム（幹事社はパナソニックホールディングス）を発足させました。その後、兵庫県神戸市、長野県茅野市、山梨県北杜市、熊本県山江村などの自治体も加わり、企業と地域をつなぐマッチングプラットフォームの機能も加わりました。同時に2019年にはKOMEX内で連携して「SDGs教育推進プラットフォーム」という持続可能な社会のための実践的なSDGs教育も開始しました」

現場と接した学生を社会へ

——「2050年カーボンニュートラル」についての考えを教えてください。

「カーボンニュートラルの達成には、科学や技術のみならず、政策立案とその実行、民間における投資マインドの醸成など、とても幅広く総合的な取り組みが求められています。環境エネルギー科学特別部門では、各分野で可能な限り現場に近い方々に講師としてお越しいただき、直接学生に接していただく講義やイベン

トを実施しました。このような活動から、一つの分野に閉じこもるのではなく如何に幅広い分野に接することが大事なのか、ある程度伝わったのではないかと思います」

——これまでの手応えと残る課題は？

「実際に部門の講義やイベントに参加した人たちがエネルギーに関わる研究や行政の第一線に進んで活躍している耳にすることがあります。2007年までさかのぼると足掛け19年の活動ですから、年月の重みを感じます。一方で、エネルギー教育や環境教育の裾野をもっと広げる必要があると思っています。まだ道半ばですが、当部門の活動を一旦総括し、次の活動の進め方を考える予定です」

——3月には、部門の活動を総括するシンポジウムが予定されていますね。

「年に一度のKOMEXシンポジウムを今回は当部門が担います。「環境とエネルギーの相克と相溶」をテーマに、浅見泰司先生、福士謙介先生、江守正多先生、沖大幹先生、NEDOの山田宏之部長らにご講演いただき、2050年に向けての展望を考えてみたいと思います。今日まで積み重ねてきた19年間の活動を未来につなぐ一日にします」

——学生へメッセージをお願いします。

「大学は牧場のような場所です。どれだけ良い草を食べて元気に育ったか、つまりいかに良質な知に出会い、思考力を鍛えたかが皆さんの将来を決めます。駒場で「知の体力」すなわち応用力や判断力に加えて広い意味での人間力も養ってください。エネルギーと環境の問題は技術だけでなく社会の仕組みと深く結びつきます。このような問題だけでなく、様々な社会問題の解決に向けて挑戦を恐れず、次世代の理想的な社会をデザインする力を磨いてほしいと思います」

サステナブル未来社会創造プラットフォームの活動はウェブサイトで確認できます。



www.sustainable.rcast.u-tokyo.ac.jp/

教養教育高度化機構（内線：44247）



UTokyo

バリアフリー最前線!

障害がある職員のお仕事拝見⑯

農学生命科学研究所
の巻

第42回

紙類などのリサイクルゴミを回収

弥生キャンパスでリサイクルゴミの回収業務を担当する農学生命科学研究所総務課の環境整備室。聴覚障害があるスタッフ6人で手分けしてキャンパス内の全ての建物を回り、古本や古新聞、雑紙、ダンボールなどを回収・整理し、台車を使ってキャンパス内のリサイクル場まで運んでいます。

「数人が同時期に退職したことがあります。その後数年間は3人で仕事をしていました。最近、若い3人がチームに加わり6人体制になったので、力を合わせて頑張っています」と話すのは5年前に入職した越川重夫さん。その新人の1人、小林裕弥さんは、「働き始めた当初は何をすればよいか分からなかったのですが、サイズを統一するための段ボールの折りたたみ方などを先輩からやさしく教えてもらい、今では何でもできるようになりました」と2024年に入職してからの1年半を振り返りました。

毎朝6人で決めているリーダーの指示に従い、手分けして建物内の各フロアを回っています。メンバー全員が手話話者なので、コミュニケーションが非常に取りやすい、と話すのは10年以上前に入職した田中博さん。「何かあったらすぐに相談でき、スムーズに業務を進めていくことができます」

繁忙期は年末と年度末。新年を迎える前に部屋を整理したり、年度末には卒業や退職する人がいるため、部屋の前に大量の本や紙類が積みあがっていることもあります。グラウンド近くのリサイクル場と建物を何度も往復することもあるそうです。

他にも、不要になった書類をシェレッダーで処理したり、乾電池や蛍光灯の回収などを行っています。「キャンパスを回っていると、椅子などの粗大ごみが捨てられていることもあります。それらを回収し担当者にお届けすることもあります」と8年目の田中義廣さん。そして、ゴミ出しについて一つお願いが。「郵便物が未開封のまま出されていることが多く、判断に困ることがあります。開封し、中身を出してから捨てていたらどうようお願いいたします」



左から：田中博さん、勝俣徳さん、小林裕弥さん、越川重夫さん、昇颯太さん、田中義廣さん。



第17回 ジェンダー・エクイティ推進オフィス通信

ジェンダー関連書籍300冊を展示

総合図書館3階にて、2025年12月19日から3月4日まで、「Shelf of Wonder第10回ジェンダー・エクイティ推進オフィス^{*1}」を開催し、ジェンダー関連書籍約300冊を展示しています。書籍は8つの分野（フェミニズム、身体、暴力、法・政治、経済、教育、文化・社会、歴史）に分類して配架し、テーブル上に、10冊の入門書と書籍内容の紹介カード、電子ブックの書影とQRコード（閲覧のためのリンク先）を付したカードを並べています。



ジェンダー関連入門書籍の展示（手前）

本企画は、ジェンダー・エクイティ推進オフィスで2025年度より始動したジェンダーに基づくハラスマントや暴力の防止を目指す「Safer Campus at UTokyo Project」の一環として行われたもので、当オフィスの生理用品ディスペンサー設置事業や、東京大学保健センター女性診療科と連携して製作した情報カードなども併せて展示しています。また、12月17日～23日に開催した東大本郷正門のパープル・ライトアップ企画^{*2}とも連動しています（p.3参照）。



情報カードの展示・配布

今後も当オフィスでは様々な取り組みを続け、ジェンダーに基づく暴力のない安心・安全なキャンパスの実現を目指していきたいと思います。

（特任研究員 小野仁美）

*1 <https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/event/20251219>

*2 <https://wechange.adm.u-tokyo.ac.jp/ja/news/933/>

ワタシのオシゴト 第236回

RELAY COLUMN

医科学研究所研究支援課
財務チーム 小金澤優太

最先端の医科学研究の地から



医科学研究所1号館の玄関にて

白金台キャンパスにある医科学研究所で昨年度から予算・決算を担当しております。医科研は現在、生命科学系で国内唯一の国際共同利用共同研究拠点に認定されており、また、国立大学附置研究所

で唯一の附属病院を有するなど医科学研究で日本をリードする研究所です。そのため扱う予算も年間執行額も大きく、特に昨今では物価高騰の影響などもあり、予算のやりくりが大変になってきています。年間収支状況について執行部と打ち合わせをする機会も増えており、財政状況を注視し、執行部への説明資料を作成するなど、忙しくもやりがいを感じる日々を送っております。

プライベートでは結婚を機に大学生以来の個人的なポケモンブームがきており、ゲーム（新作のZAもやってます！）やカード、アニメ等幅広く楽しんでおります。特にカードにはまっており、相手の動きの予測など仕事とは異なる刺激で、脳の活性化にもつながっている…気がします。



5千人規模の大会で好きなポケモンと

得意ワザ：複数作業を同時に進めること

自分の性格：詰めが甘い

次回執筆者のご指名：後藤晏奈さん

次回執筆者との関係：新規入職時の昼ご飯仲間の一人

次回執筆者の紹介：馬に乗れるシゴデキな同期

専門知と地域をつなぐ架け橋に
FSレポート!
第41回 奥村紘大
文科三類1年
増田大夢
理科一類2年
猪原阜良
農学部3年

1杯の桑茶から、江津を全国へ！

「江津」と書いて、なんと読むかご存じだろうか。「うーん、えつ…？」違う。それは春秋時代の中国王朝である。「こうす、かな…？」惜しいが、それは神奈川県南西部の地名だ。正解は「ごうつ」。島根県にある、東京の人には少し馴染みの薄いこの市が、私たちFS生が1年間向き合い続けているフィールドである。



特産品とチラシとともにパシャリ！

10月18日、私たちは活動の一環としてホームカミングデイ（以下HCD）に出店した。行ったのはチラシ配布、物品販売、そして江津特産である「桑茶」の試飲だ。「桑茶の試飲で足止めし、江津高校の生徒さんが作ったチラシと共に活動説明を行い、断りづらくなつたところであわよくば特産品を買ってもらう」という、少々強引な作戦である。途中、試飲用の紙コップが不足するハプニングはあったものの、概ねミッションはコンプリートできたと言つていいだろう。

そもそもなぜ私たちは今回HCDに出店したのか。それは江津市FSの目標である「将来地域に学校を残すため、ファミリー層の移住を促進する」という点に起因する。この達成にはUターン促進が不可欠であり、現地の高校生との連携が必要だ。しかしそれだけでは不十分で、「縁もゆかりもないが、魅力的だから住みたい」という人を増やす必要もある。だからこそ、多くの人が集まるこの場所で知名度向上を図ったのだ。

実際に出店してみると、知名度の低さを痛感する場面もあった。しかし一方で「私、江津出身です！」「今度行ってみます」という温かい声もいた。思いがけ

ない素敵な出会いに、涙が出るほど嬉しかった。PRの場としてだけでなく、こうした意外な出会いこそがHCDの魅力なのかもしれない。

当日は山形県高畠町、長崎県佐世保市、佐賀県鹿島市、石川県能登町支援の各チームも参加し、会場は活気に満ちていた。特に高畠町のワインは魅力的で、筆者も二十歳になつたらぜひ味わってみたいと思う。貴重な場を提供していただいたことに、心から感謝したい。



お客様に活動概要を説明

インターブリターズ・バイブル

教養教育高度化機構 客員教授
科学技術コミュニケーション部門 青野由利

科学を美しい空間で

昨秋、「なんちゃってワーケーション」を決行した。場所は、わけあってフランスのパリ。招聘されたわけでもなんでもないので、渡航費も滞在費もすべて自費。でも、「ワーケーション」ではないので、自分なりのテーマを二つ設定した。

一つは「博物館における情報とメディア」だった。なぜなら、東大の科学技術コミュニケーション部門とは別に、某私立大学の非常勤講師として「博物館情報・メディア論」を担当しているからだ。

これを題材にパリ滞在中、博物館や科学館に通った(ちなみに、盗難で話題をよんだルーブル美術館には足を踏み入れていません)。

系統立てて訪問したわけではないので、「感想」程度にとどまるが、感じたことが二つある。

一つ目は、歴史的建造物やアートと科学との融合が随所にみられることだ。

たとえば、パリ3区にある工芸技術博物館 (Musée des Arts et Métiers)。技術史をたどることのできる興味深い場所だが、もとはと言えば中世の教会らしい。美しい礼拝堂には物理学者レオン・フーコーが1851年にパリのパンテオンで公開実験した「フーコーの振り子」の実物のおもりや、振り子実験が展示されている。

そのパンテオンも巨大なドームを持つ歴史的建造物で、今も高い天井からレプリカの金色のおもりが吊り下げられ、当時の実験を再現し続けている。

16世紀以来の歴史を秘めたパリ市庁舎では、企画展「パリからベレンへ 地球規模の気候変動対策の10年」が開かれていた。庁舎の外壁には巨大な現代アート作品が掲げられ、環境問題への強いメッセージを伝えている。

いずれも、単に科学や技術を展示しているだけではなく、その空間が美しく、歴史も感じられる点が、ちょっとうらやましい。

二つ目は、「子ども」を意識した展示が目立ったことだ。工芸技術館でも、パリ市庁舎の企画展でも、人類学博物館でも、子ども向けのパンフレットが用意され、展示のそこここに子ども向けの解説やゲームなどを通じて学べる工夫がされていた。実際、子ども連れの訪問者も多くみかけた。

もうひとつ気になったのは、日本では国立科学博物館をはじめ、多くの博物館の窮状がニュースになっているが、フランスではどうなのか、という点だ。今回は調べる余裕がなく、次回のテーマとしたいが、それにしても円が安すぎる! これでは「次回」がいつになるか、まるでおぼつかない。

ききんの 寄付でつくる東大の未来

第75回 社会連携部涉外課
副課長

き

加藤有央子

本部棟7階から

「本部棟の7階では何をしているの?」とよく尋ねられます。半年を過ごした今も、すべてを語れるわけではありません。ただ一つ確かなのは、ここは東京大学基金を通じて、東大の未来を最も真剣に思索し、前向きな意志に満ちた部署だということ。よりよい東大の姿を実現しようとする熱意があります。熱い。

さて、12月は寄付月間。今年度もディベロップメントオフィス・涉外課では「寄付月間キャンパスキャラバン」を実施しました。今回は、昨年度に伺えなかった弥生と駒Ⅱへ。私にとってお世話になったキャンパスです。イベント開催となると多く教職員の方のご協力を要するため、なんとなく心苦しく、周知は控えめに、事務担当の方へ事前のお願いだけにしていました。それでも当日、思いがけず多くの方が足を運んでくださり、寄付の意義と本学の現状に耳を傾け、賛同の気持ちを託してくださいました。胸に残るのは、ただただ感謝です(結果、今年度は昨年度よりさらに多くの方にご支援いただきました。ただ、教職員の寄付割合はまだ1ケタ…。少しでもこの輪が広がり、2ケタになりますように)。

仕事において綿密な準備と努力は成果に結びつきますが、寄付の仕事はそれだけでは足りません。気持ちが届き、相手の心が開き、すべてが整ったとき、自分の力だけでは成しえなかつた感謝と達成感、そして素晴らしい幸福感にお互いに満たされる、なんとも不思議な仕事です。

決してスイスイ進む仕事ではありません。ファンディレイザーは日々、足で寄付者を訪ね、東大のための支援を丁寧に紡いでいます。泥くさく、地道な仕事でもあります。そして東大への思いは強い一方で、学内の事情に不案内なことも多いにあたりもします。ファンディレイザーが皆さんの研究室や事務室を訪れた際は、どうか同じ目線で温かく迎え入れてください。ともに東大を前へ。東京大学基金、そしてディベロップメントオフィスは、これからも東大を盛り上げてまいります。



東京大学基金 <https://utf.u-tokyo.ac.jp/>

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles) に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
12月9日	総合文化研究科・教養学部	国際社会科学専攻の細川瑠璃准教授がサントリー学芸賞を受賞
12月9日	教育学研究科・教育学部	令和7年度教職課程・学芸員等実習報告会を開催
12月9日 ～1月13日	広報室	生活に支障をきたすほど没頭してしまうゲーム依存=大野志郎 信長の研究者が『信長の野望』を30年ぶりにプレイしてみたら?=金子拓 『ポケモンGO』が中高年の歩数を増やしていた=樋野公宏 生物の謎解明はポケモンへの関心から始まった=川口喬吾 科学と社会の課題を炙り出す推理ゲーム『nocobon』とは?=江間有沙／広報誌『淡青』51号
12月10日	工学系研究科・工学部	Kurose教授、Larry教授がグローバルフェローに就任
12月11日	総合文化研究科・教養学部	地域文化研究専攻の鶴見太郎准教授がサントリー学芸賞を受賞
12月11日	コミュニケーション戦略本部	本学教員の起訴を受けて
12月12日	教育学研究科・教育学部	中学・高校における探究学習の実態と効果を可視化する共同研究を開始
12月12日	本部コミュニケーション戦略課	東京大学が保管している沖縄県由来の人骨について (報告)
12月15日	定量生命科学研究所	胡桃坂仁志教授が島津賞を受賞
12月16日	本部国際戦略課	東京フォーラム2025が11月21日、22日に開催
12月17日	本部環境安全課	令和7年度本部防災訓練を実施
12月19日	本部涉外課	株式会社デンソーとネーミングプランの協定を締結
12月19日	本部コミュニケーション戦略課	国際卓越研究大学第2期公募の審査の結果を受けて (総長メッセージ)
12月22日	農学生命科学研究科・農学部	矢守准教授の研究成果が「2025年農業技術10大ニュース」に選定
12月23日	本部総務課	2025年度業務改革総長賞表彰式を開催
12月26日	コミュニケーション戦略本部	箱根駅伝直前／関東学生連合チームに入った2人の東大選手に聞く
1月5日	本部入試課	令和8年度大学入学共通テスト東京大学試験場案内 (本郷・教養学部試験場)
1月6日	本部学務課	SPRING GX 2026年度春入学の博士課程出願者を対象に募集
1月6日	本部学務課	BOOST NAIS 2026年度春入学の博士課程出願者を対象に募集
1月6日	本部コミュニケーション戦略課	2026年 藤井総長年頭挨拶
1月7日	本部環境安全課	令和7年度 総長安全衛生パトロールを実施
1月7日	コミュニケーション戦略本部	乳酸、低酸素、集団走に脚スティッフェス……淡青色のランニング関連研究／箱根駅伝2026記念企画
1月13日	本部コミュニケーション戦略課	令和7年度退職教員の最終講義2月開催分のお知らせ
1月13日	本部学生支援課	陸上運動部秋吉選手と本多選手が箱根駅伝に出走！

表紙について

本誌には、新年1号目の表紙に干支の動物にまつわる画像を掲載する習わしがあります(1978年1月発行の392号から)。吉例に則り、午年の今回は、本学運動会馬術部で活躍した森本理香子さん(経済学部4年)とコタロウ号の写真を掲載しました。初出は高大接続研究開発センターのオンラインメディア「キミの東大」。馬術部一色の大学生活を送ってきた森本さんにとって、2022年に三鷹馬場に来たコタロウは、苦楽を共にした友達のような存在でした。「キミの東大」の取材を受けたのは、コタロウが離厩して軽井沢の出身牧場に戻る日の前日。コタロウはトレッキングホースとして。森本さんは国家公務員として。それぞれが新たな目標に向けて歩み出そうとしています。



小学生の頃に五月祭で乗馬体験したのがきっかけで東大に進んだという森本さん。インタビューとコタロウとのアザーカットはこちらから→ <https://kimino.ct.u-tokyo.ac.jp/33709/>

中西祐介さんは馬や馬術やスポーツを中心に関連するフォトグラファー。著書『いい写真はどうすれば撮れるのか』(技術評論社)にも注目です。 <https://www.nakanishiyusuke.com/>

UTokyo 雪景色から満開の桜へ

思わず誰かに見せたくなる、ちょっと不思議なクリアファイル。白い紙を入れると赤門に雪が降り積もり、門がそっと開きます。紙を取出すと一転、淡いピンクの桜の花びらに包まれ、赤門が静かに閉じる仕掛けです。冬から春へ、季節の移ろいを一つのファイルで楽しめるのが魅力！ A4サイズで使いやすく女子高生にも大人気!! 写真に撮ってシェアしたくなるデザインです。(田)



UTCC から
のお知らせ

マジック
クリアファイル赤門
(桜/雪)
450円
(税込み)



→オンラインストア



CLOSE UP 令和7年度 総長安全衛生パトロールを実施

(本部環境安全課)



医学部2号館地下1階解剖室にて。法医学、地域看護学、衛生学、微生物学、人類生態学など多彩な分野の現場を巡回しました

11月17日、医学系研究科・医学部を対象として、総長安全衛生パトロールを実施しました。このパトロールは、本学の環境安全衛生管理を総括する総長自らが現場に臨場して全学の安全衛生意識を向上させることを目的とし、平成18年度より毎年度実施しています。

藤井輝夫総長、齊藤延人理事、角田喜彦理事、岸利治環境安全本部長ほか、環境安全本部員及び施設部の関係者が、対象部局の各施設、設備等の管理状況等を環境安全衛生上の観点から巡回しました。

パトロール後の講評会では、藤井総長から、医学部の活動は多様で、安全管理も幅広く実

施されていることが確認できたこと、廃水・廃液処理や感染防止については、リソースを確保しながら一層の環境安全衛生に配慮した対応の検討が必要であること、また、医学部ではクライオ電子顕微鏡などの最先端機器を活用できる環境整備が進展しており、全学的な機器共用体制も整えていきたいこと、海外渡航を伴うフィールドワークの安全担保は難しいが、広く共有可能な仕組みを検討し、より良い方法を模索することが望まれること、加えて、老朽化した建物で活動している構成員らの安全確保や作業環境の改善も課題であること等の講評がありました。



CLOSE UP 21 KOMCEE West の地下が「DENSO ラウンジ」に (本部涉外課)



21 KOMCEE West地下1階カフェテリア横の「DENSO Lounge」

東京大学が公募した「駒場キャンパス教養学部 21 KOMCEE West 地下1階カフェテリア横ラウンジスペース」(以下、「ラウンジ」)のネーミングプランに、株式会社デンソーが協賛し、愛称を定める協定を締結しました。

知的基盤としての教養教育に対する社会的要請が高まるなか、駒場キャンパスのより一層の教育研究環境の整備を目的として、教育・研究に賛同する民間企業等との連携機会

を拡大し、キャンパスの整備を効果的に行うための取り組みの一環です。

本協定により、このラウンジは2030年11月までの5年間、「DENSO Lounge」の愛称で呼ばれることになります。このラウンジでは、座席とテーブルが広々としたスペースに広がり、ル・コルビジェのデザインしたレプリカチェアに座って、学生たちがゆっくりした時間を過ごすことができます。



CLOSE UP 中・高の探究学習を可視化する共同研究を開始 (教育学研究科・教育学部)



今年度は30校を対象に調査を実施する予定です

教育学研究科附属 学校教育高度化・効果検証センター (CASEER) と、株式会社教育と探求社は、中学校・高等学校における探究学習の実態と、生徒の学びや意識への影響を把握する共同研究を、2025年11月1日より開始しました。

本研究では、特に民間企業と連携した探究学習プログラムに着目し、調査設計、実施、分析を行い、得られた知見を報告書等で公表していきます。CASEERの学術的知見と、教育と探求社が20年以上にわたり学校現場と共に積み重ねてきた実践知を掛け合わせ、探

究学習の質向上に向けた示唆を整理します。

探究学習は全国の中学校・高等学校で広がり、実践も多様化しています。一方で、「どのような取り組みが、どのような学びにつながっているのか」を、学校現場のリアルに即して捉え直し、共有していくことの重要性が高まっています。

今回の共同研究では、両者の知見を結集し、探究学習の実態と効果を多角的に明らかにすることを目指します。また、将来的には調査項目を継続して用いることで、教育効果の検討につながる可能性も見据えています。



CLOSE UP 2人の東大ランナーが箱根駅伝2026に出場！

(本部学生支援課)



左から秋吉選手、沿道の応援の幟、本多選手。UTokyo FOCUSでは、両選手の本番直前インタビューとスポーツ先端科学連携研究機構の関連研究を紹介しています

1月2日・3日に開催された第102回東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）において、本学運動会陸上運動部の秋吉拓真選手（工・4年）・本多健亮選手（工・M2）が関東学生連合チームとして出場しました。本多選手は補欠一番手で出走の予定がない中、4区出走予定選手の体調不良により前日に急遽出走が決定。平塚中継所にて襷を受け取り全21選手中区間20位相当の走りで5区へと襷を渡しました。往路の準エース区間とも言われる4区で、急遽出走ながらベストを尽くしました。

翌日の復路7区には秋吉選手が出走。11月に肺炎にかかりましたが、諦めず準備を進め、好調に戻して本番を迎え、6区の選手から襷を受け取り、快調に飛ばして区間4位相当の好タイムを残しました。秋吉選手は「昨年に引き続き2度目の箱根駅伝となりましたが、沿道の大歓声を浴びて走る感動は1回目と全く変わらないものでした」、本多選手は「急遽出走が決まったにも拘らず応援に駆けつけていただいたことは感謝してもしきれません」などとコメントしてくれました。



点と点を結びつける「原石」を磨く

2025年のノーベル生理学・医学賞はMary E. Brunkow博士、Fred Ramsdell博士、坂口志文博士に授与された。私は2001～2003年に坂口先生の研究室に在籍し、Brunkow博士とRamsdell博士らが同定した $Foxp3$ 遺伝子の機能解明に関する研究に携わった。その研究が後にノーベル賞という形で評価されたことは感慨深い出来事であったが、授賞式に臨席して心にわきあがっていたのは、研究に取り組んでいたときの興奮と感動であった。そして、同じような思いを研究室のスタッフや学生たちにもぜひ一緒に味わってもらいたいと考えていた。

「アイデアとは既存の要素の新しい組み合わせ以外の何ものでもない」とはJ.W.ヤングが著書『アイデアのつくり方』で述べた有名な言葉であるが、私が携わった研究も、当時は関連があるとは思われていなかった制御性T細胞と $Foxp3$ という2つの要素を結びつけたものであった。本学で研究・教育に携わり、先端的な研究の実践を通して創造性豊かな若者を育てることを自分の大きな使命と考えている。そのためには、一見何の関係もないように思われる点と点のあいだに線を引いて結びつける能力を涵養することがキモであると思われる。

昨年度、総長補佐の任を仰せつかり、「入試チーム」で学校推薦型入試や総合型選抜入試について議論した。学力試験だけでは測ることが難しい能力を持った「原石」をどうしたら発掘できるか、そのような「原石」を入学後にいかに磨くことができるのか、考える機会となった。点と点を結びつけるには、そもそも点の存在をその文脈まで含めて知識として持つことは必要条件であるし、その能力を測ることにかけては本学の一般入試は優れていると思われる。しかし、その能力は決して十分条件ではないことが問題なのだ。

点と点を結びつける力は、最初から完成された才能ではない。それは、知識を身につけ、問い合わせ、考え、他者と議論し、試行錯誤する中で、少しずつ形づくられていくものである。本学がそのような場であり続けるならば、入試によって見いだされた「原石」は、やがて自ら線を引き、さらには新たな「面」を描いていくはずである。その瞬間に立ち会えることこそ、研究と教育に携わる者にとっての最大の喜びなのだと思う。

堀 昌平
(薬学系研究科)